

考古学の教科書

—奈良大学文化財学科における考古学の講義から—

酒 井 龍 一

はじめに

わが国では考古学一般を解説した本格的な教科書はない。ここでは、基礎的な理論・学史・研究者・概念・分析法・用語等を解説した代表的な英文の教科書3冊と、その解説に参考となる辞書2冊、学史書1冊、文献集1冊、問題集1冊を簡略な解説をつけ紹介する。

講義内容の事例

教科書等を紹介するに先だち、どのような考古学の授業が初心者用にされているのか、アメリカの大学での1例を紹介する(第1表)。学校は南西部における考古学研究の拠点アリゾナ大学、教員は伝統的な考古学から新しい考古学への橋わたし役をされたアメリカ南西部考古学の大御所レイモンド・トムプソン教授(アリゾナ州立博物館館長)、時は新しい考古学全盛期の1980年代始め、対象は初心者、講義名は「考古学の原理」、一応の教科書は3冊、授業は早朝8時から、月水金の週3回、年間の合計45講義、試験は4回であった。前もって年間の休講予定が示されているのは教員の律儀な性格を現わしている。

教科書

1960~70年代は伝統的な考古学から新しい考古学(ニューアーケオロジー)への大きな転換が始まった時代であった。それゆえ伝統的な認識による60年代の教科書と、新たな理論的進展を含みつつ作成された70年代以降の教科書とは、その構成や内容は大きく異なる。例えば、60年代に著名なホール・ハイザー両氏による教科書は、私の手元にあるだけでもその後10年間に3種の改訂版(特に2版と3版では大幅な改編)があり、この時代における新しい考古学への対応の足跡(=教科書の編年)を具体的にみることができる。

Frank Hole and Robert F. Heizer, 1966, An Introduction to Prehistoric Archaeology, Holt, Rinehart and Winston.

Anthropology 235, Principles of Archaeology Instructor: Raymond H. Thompson, Museum 30
1981-82, I, MWF 8:00 A.M., Anth 216

Grad. Assist: Ed Staski, Anth 313

Telephone: 626-2796

Office Hours: MTW 9-10:00 A.M.; or by
appointment

Books: The Testimony of the Spade, Geoffrey Bibby; Mentor, 1974.

The First American, C.W. Ceram; Mentor, 1972.

Archaeology, David Hurst Thomas; Holt, Rinehard, Winston, 1979.

Read all materials before lecture on day assigned.

45 class meeting; 41 lectures, 3 hour exams (40 points each), final exam (80 points),
total points, 200. All exams are essay type. Blue Books are required.

Class	Date	Lecture Topic	Bibby	Reading Assignment	
				Ceram	Thomas
1	Aug. 24	Introduction			Ch. 1
2	26	Historical Prerequisites			
3	28	Antiquarian Beginnings			
4	31	Antiquity of Man	Ch.2,3,4,5,6		
5	Sep. 2	Three Ages System	Ch.1,7		
6	4	New World		Ch.1,12,15,20	
	7	NO CLASS			
7	9	Opening of the West	Ch.8,9,13	Prelude,14,16	
8	11	HOUR EXAM 1 (40 points)			
9	14	Discovery of Mesoamerica			
10	16	Popularization of Archaeology			
11	18	Archaeology and Literature		Ch.23,24	
12	21	Institutional Development		Ch. 21	Ch. 17
13	23	Early Southwest		Ch.3,4,5,11,13	
14	25	Recent Developments	Ch. 19,25	Ch. 10,12	Ch. 12
15	28	Role of Government			Ch. 4
16	30	Archaeology and Law			
17	Oct. 2	Public Archaeology			
18	5	Cultural Resource Management			
19	7	HOUR EXAM 2 (40 points)			
20	9	Archaeology and Anthropology		Ch. 6	Prologue,Ch. 1
21	12	Concept of Culture			
22	14	Nature of Evidence			
23	16	Spatial Relations			
24	19	Associations			
25	21	Concept of Time			
26	23	Stratigraphy		Ch. 7	Ch. 5
27	26	Dating	Ch. 12	Ch. 8,9,20	Ch. 6
28	28	Scientific Method			Ch. 2
29	30	Inference and Analogy			
30	Nov. 2	Subjective Element			
31	4	Organizing the Evidence			Ch. 7
32	6	HOUR EXAM 3 (40 points)			
33	9	Seriation			Ch. 7
	11	NO CLASS			
34	13	Sampling			Ch. 9
35	16	Settlement Patterns			Ch. 9
36	18	Site Patterns			Ch.10
37	20	Subsistence			Ch. 8
38	23	Economic Organization,			
39	25	Social Organization			Ch.10
	27	NO CLASS			
40	30	Speculation			Ch.11
41	Dec. 2	Limitations			Ch.13
42	4	Potentialities			
43	7	Archaeology and Citizenship			
44	9	REVIEW SESSION			
45	18	FINAL EXAM (80 points) 8:00-10:00 A.M.			

1969, An Introduction to Prehistoric Archaeology, second edition.

1973, An Introduction to Prehistoric Archaeology, third edition.

1977, Prehistoric Archaeology, A brief introduction.

さて、ここに紹介するのは1970年代の新しい考古学の諸成果を十分に含みこんだ次の3冊の教科書である。

David Hurst Thomas, 1979, Archaeology, 1-510pp.. Holt, Rinehart and Winston.

prologue

Part one Anthropology, Science, Archaeology

- 1 What Are Archaeologists?
- 2 What Is Science?
- 3 What Is Anthropology?
- 4 What Is Contemporary Archaeology?

Part two Archaeology's Initial Object:

Construct Cultural Chronologies

- 5 Stratigraphy
- 6 Establishing Chronological Controls
- 7 Sorting Cultural Things in Time

Part three Archaeology's Intermediate Objective:

Reconstruct Extinct Lifeways

- 8 How People Get Their Groceries:
Reconstructing Subsistence Practices
- 9 Why People Live Where They Live:
Reconstructing Settlement Patterns

10 How People Relate to One Another:
Reconstructing Social Organization

11 How People Relate to Their Cosmos:
Religion and Ideology

Part four Processual Studies in Archaeology

- 12 Processes That Create the Archaeological Record
- 13 General Theory in Archaeology

Glossary

Bibliography

Index

著者、トーマスは1971年にカリフォルニア大学デービスで学位をとり、計量的な考古学理論を専門とする。この教科書では、考古学は科学的・人類学的立場からとらえられる。本書は、先のアリゾナ大学でのレイモンド・トンプソン教授による初心者用の授業にも用いられていた。

先ずプロローグでは、著者、自らのネヴァダ州ゲイトクリフ遺跡の調査を紹介しつつ、考古学では物的資料とそれがもつ情況 (context) がすべてであることの理解を求める。

1章では、アメリカ考古学の歴史を、ジェファーソン・ムーア・ネルソン・キダー・フォード・タイラー、そしてピンフォードの流れで理解し、今日 (1960~1975) を構成する「新しい考古学」もやがては過去のものとなるとみとおす。2章では、科学的サイクルとよばれる仮説構成一橋渡しの論議一検証という一連の手続きにより、地域的・時間的限定をはずした文化過程の一般法則を説明しようとする科学的な考古学が解説される。具体的な模範演技として、農耕起源の解明にとり組むマクネッシュのメキシコ・テワカン溪谷での研究活動や、あのシュリーマンのトロイでの活動の詳細があげられる。3章では、人類学の一分野である考古学は、文化研究を担当する文化人類学と深く関係し、シンボルや認知等にかかる観念的な立場と、環境に対応する技術という物質的な立場の両方から影響されるという。同時に、現在われわれが観察しうる考古学的状況と過去の人間の行動とのギャップを埋めるには、「人類学的な入力」の必要性が明示される。第1は文化編年の構成、第2は過去の生活様式の再構成、そして第3は人間行動の基礎をなす文化過程の一般法則の説明にあるとする。

第1の文化編年を構成する具体的な手段に、5章で層序累重の法則による層位学と標準遺物の概念、6章で年輪年代や放射性炭素による各種の絶対年代決定法、7章で遺物の型式分類と編年とりわけセリエーション (seriation) による相対年代決定法が解説される。

第2の過去の生活方法の再構成には、8章で有名なオルセン・チュバック遺跡をあげて動物考古学、イギリス・スターカー遺跡他をあげて花粉分析が、生業活動を追及すべく方法として解説される。9章では、いわゆるセトルメントアーケオロジーがとりあげられる。この分野の先駆者として有名なウイリーによるペルー・ヴィル溪谷でのセトルメントパターン調査が紹介され、以降の代表的な研究例も羅列される。以下、広域研究の事例にトーマス自らのリース川溪谷での統計学的な調査、中心地理論にかかるマヤでの立地分析、フラナリーによるメキシコ・オアハカ溪谷での遺跡の領域分析の実践例等が紹介される。10章では社会構成を把握すべく、組み合わせ道具・基本生活維持施設・社会階層等の解説、11章では儀礼・宗教・暦や思想等についての研究例が提示される。

第3の文化過程の一般法則を目指す12章では、今日のアメリカ考古学の要点である中範囲理論、遺跡の形成過程、現存社会の考古学的調査、実験考古学、ラスジェによる現在都市のゴミ調査という先進的な諸項目がとりあげられる。

最後の13章では、考古学の究極の目的である文化過程、具体的には農耕の起源や古代国家の形成過程の解明というような一般理論の説明をめざし進むことを再確認して締めくくりとする。

なお巻末には300語の用語解説と567冊の参考文献が掲載されている。

Robert J.Sharer and Wendy Ashmore, 1979, Fundamentals of Archaeology, 1-614pp..
The Benjamin /Cumming Publishing Company, Inc.

Part I	Introduction
	1 introduction
	2 The Growth of Archaeology
	3 The Nature of Archaeological Data
	4 Archaeological Research
Part II	Data Acquisition
	5 Archaeological Reconnaissance
	6 Surface Survey
	7 Excavation
Part III	Data Processing and Analysis
	8 Data Processing and Classification
	9 Analysis of Archaeological Data
	10 Temporal Frameworks and Chronology
	11 Spatial Frameworks and Ancient Behavior
Part IV	Synthesis and Interpretation
	12 Analogy and Archaeological Interpretation
	13 The Cultural Historical Approach
	14 The Cultural Processual Approach
Part V	The Past in the Present and the Future
	15 Challenges to Archaeology
	Glossary
	Suggestions for Further Reading
	Bibliography

Index

著者、ジャーラーは1968年にペンシルバニア大学で学位をとり、中央アメリカの考古学を専攻、アシュモアー (she) はカリフォルニア大学ロスアンゼルス卒業後、執筆時は1967年のペンシルバニア大学で学位取得中、中央アメリカの考古学を専攻している。

『考古学の基礎』と題するこのテキストは、考古学一般を、文化史研究としての伝統的な考古学と文化過程研究としての新しい考古学という両側面から解説される。両時代を演出してきたアメリカ考古学の大御所ウイリーによる序文は、この本が、考古学がたどってきた道程や現在の位置そして将来にむけての優れた要約であると推奨する。

先ず1章では考古学の全体像が概略され、その中で考古学は物的資料をとおして過去の社会や文化を研究する、すなわち過去の出来事を順序づけ記述し出来事の意味を説明する学問と定義される。そこにはやや歴史的な観点が含まれ、歴史学の一分野としての日本考古学にはいくぶん理解しやすい定義となっている。また考古学の目標として、資料の形態についての記述や分類、形態や相互関係の分析からの機能分析、それらの時代的変遷としての文化過程の理解という段階的な3点があるとみる。

2章では、遺物収集に始まるアマチュア考古学から現在の科学的な考古学=過程学派の考古学にいたる経過が、単系進化論・機能主義・歴史主義・文化生態学・複系進化論等の人類学や考古学での多様な学派や学説とともに解説される。3章では、考古学の観察対象である人工遺物 (artifacts)・自然遺物 (ecofacts)・遺構 (features)・遺跡 (sites)・地域 (regions) の特質とともに、シファーによる行動考古学的な観点から遺跡の形成過程、あるいは考古学資料を得るためのサンプリング法が詳細に解説される。発掘にかかわる4章では、調査の計画や調査体制の立て方から報告書の刊行まで一連の作業内容が、自らのガテマラでのキリグアプロジェクトを例に解説される。更に5章では予備調査、6章では遺跡の表面観察、7章では発掘、8章では遺物整理の作業手順と分類、9章では石器や土器の人工遺物とあるいは自然遺物他の各種資料の分析という考古学での基礎的な作業がそれぞれ詳しく述べられる。10章では、セリエーションを中心とした遺物の相対的編年と、年輪年代決定法や放射線炭素による年代決定法等、各種の絶対年代決定法が学史や原理を含めて解説される。11章では、社会体系の再構成をすべく、技術・環境・生業・セトルメント考古学・交換体系・象徴や思想等について論議される。12章では、資料からのどのように過去の人間行動を類推するのか、ディーツの土器研究やビンフォードの「皮いぶし穴」事例をひきながら解説する。また類推の方法として、文献資料による直接的な歴史的方法・現存社会の考古学調査・実験考古学という3点がある。13章では、アメリカ考古学の舞台であった南西部をとりあげ、その主役たるキダーの活動を紹介しつつ伝統的な文化史的方法を解説する。また世界各地の文化段階も紹介される。文化段階の変化の原因として、文化内部からの発展によるもの、外部

の文化から影響されるもの、そして自然環境の影響によるもの、という3モデルが解説される。14章では、今日の考古学の到達点である過程学派考古学への道程を、チャイルド、シュワート、ホワイト、タイラー、ビンフォードをあげて解説し、過程派考古学を構成する仮説演繹法・システムモデル・文化生態学・複系進化モデル・文化変化の原因等を解説する。なお、著者は考古学者は両方の背景とすべきと理解するが、ついでには科学の革命についてのトーマス・クーンをあげて新旧両パラダイムの関係を論議する。最後に15章で、現在の考古学の進展を阻害する2つの問題を取りあげ、本書の締めくくりとする。一は盗掘や資料を学問的でないやりかたで再構成に用いる擬考古学と称すべきもの、二はより深刻で基本的な問題で開発に伴う遺跡破壊や開発行為者との契約発掘等である。

巻末には基本用語304の解説と667冊の参考文献が掲載される。

William L.Rathje and Michael B.Schiffer, 1980, Archaeology, 1-434pp..
Harcourt Brace Jovanovich, Inc.

- 1 Introduction
 - 2 Traditional and Applied Archaeology
 - 3 Basic Concepts of Human Behavior
 - 4 Artifacts and Behavior
 - 5 Cultural Formation Processes
 - 6 Environmental Formation Processes
 - 7 Recovery
 - 8 Analysis
 - 9 Inference
 - 10 Explanation
 - 11 The Course of Culture
 - 12 Archaeology and Society
- Glossary
Bibliography
Index

著者、ラスジェは1971年にハーバード大学で学位をとり、中央アメリカの考古学と現在物質文化 (modern material culture) としての都市ゴミを15年間にわたり研究中。シファーは1973年にアリゾナ大学で学位をとり、行動考古学 (behavioral archaeology) の先駆者として活躍中である。

本書は典型的な新しい考古学者による著作である。各所になぜかマクドナルドのレストランやドジャーズの野球場、あるいはカンピールのふた等がでてきて読者を驚かす。

1章では、考古学は人類学の一分野で、あらゆる時代や場所におけるモノ (materials) と人間の行動 (behavior) との関係を研究する学問と定義される。原始時代に焦点をあわす一般的な考古学に対し、現在までのあらゆる時間を対象とすべきだという著者の主張を明確にするため、マクドナルドのレストランとインディアンの住居跡等の時代的变化を例示し、研究対象として時代の新旧は問わないことの理解を読者に求める。2章では、伝統的な研究例として農耕の起源=過去を解明しようとするマクネッシュの活動等を、また生きている世の中=現在を研究する考古学の応用例としてイエーレンによる現存ブッシュマンのキャンプや自らの現在の都市ツーンソンのゴミ研究 (Garbage Project) 等をひきあいにする。文化人類学と比べ、遠き過去から現在までの長き時代を対象にできる考古学の特徴は、人間行動の長期的な変化を説明することにあるとみる。手続きには科学的方法が不可欠なので、ここでその作業手順が示される。3章では、居住・部族・社会・首長・国家・その他を解説するとともに、研究対象が人間の行動や集団やあるいは社会にあること、またそれらすべては時間的に変化することの理解を求める。そして部族社会から工業国家までの社会モデルの諸段階が示される。4章では、行動考古学の立場から、物的資料である考古学的遺物と人間の行動との関係が論議される。そもそも各遺物は、形態・位置・頻度・組成にかかる固有の4つの特性をもつと同時に、技術機能・社会機能・観念機能を具体化するものと見る。また各遺物は、素材獲得—製作—使用—(修理)—廃棄という過程を経る。そして南西部インディアンの土器を例に、個人や家族・作業集団・共同体・地域システム等の諸レベルでの形態的変異性について諸認識を、生産物やその形態の移動伝播について人間の移動・交易・大量生産の影響を解説する。形態の時代的变化についてはホホカムインディアンの土器やデーツによる有名なニューイングランドの墓石を例に、セリエーションとともに解説される。5章では、シフターが最も得意とする遺跡の形成過程 (site formation processes) のうち、文化的な形成過程 (cultural formation processes) が論議される。についてはドジャーズの球場を例に、球場がどのように人間の手により遺跡になっていくかを観察しながら、現実の社会である体系的状況 (systemic context) や遺跡としての考古学的状況 (archaeological context) あるいは文化的な形成過程を構成する再使用 (reuse)・廃棄 (declamation)・廃物利用 (reclamation)・攪乱 (disturbance) という4つの基本的概念が解説される。更に各項目では基本用語や概念が解説される。対する6章は、遺跡の形成過程のうち自然の作用による形成過程 (environmental formation processes) が基本概念と共に詳細に解説される。ここでは、影響の原因となる化学的・生物学的・物理的な自然力、自然力の作用する時間、埋没の原因、原因の発生する空間規模という4要因が遺跡の形成過程に作用することになる。

ここまでは遺跡に対する基本的な認識が解説されたのに対し、以降は実際の調査研究法が解説される。7章では主に情報収集の技術について具体的には作業手順が示され、資料のサンプリング、ジェネラルサーヴェイ、発掘調査、記録化、発掘道具、その他の項目が解説される。8章では、収集された情報をいかに分析するか、カンピールやテレビヤビンや石器土器をあげて人為物についての分類や編年作業、やぎの角や人間の歯といった自然遺物をあげての観察点、インディアンの遺跡をあげての建造物の様相等が解説される。分析を踏まえての9章では、前提としての型式学やセリエーションと年輪年代決定法という相対・絶対年代決定法を解説し、作業空間、セトルメントシステム、人口、生業、交易、富、社会、資源、社会の相互作用等の項目をとりあげ、いかに考古学的資料から各レベルでの人間の行動を推論していくかが解説される。説明にかかる10章では人間行動の変化の一般過程を説明すべく、シュワードやホワイトをあげて文化進化論を解説し、理論的前提を理解する。変化の原因として人口、農耕、富、交易、環境を解説し、文化内部説、文化外部説等の各立場が紹介される。11章では文化変遷の基本的な流れがざっと紹介される。結論となる12章では、考古学と現在社会との関係が論議され、文化資源としての遺跡の意義や行政の対応等に対する見解が述べられる。最後に、過去の社会もそうであったように、複合的な現代社会も出現・崩壊という基本的な過程をたどることを予測して、本書の締めくくりとされる。

巻末には237の基本用語が解説されている。とりわけ遺跡の形成過程にかかわる著者独自の用語が網羅されており有効。参考文献739冊は各章別に分けて掲載されている。また各章毎に、ツタンカーメン発見者のカーター、エスノアーケオロジーのパティエ、文化進化論のホワイト、『考古学への招待』のディーツ、ペコスプエブロのキダー、オールドバイのリーキー近代考古学の父ウィリアム、『マヤの芸術と建築物』のタチアナ、スカラブレーのチャイルド、怒れるビンフォード、セトルメントパターンのウイリー、そしてアーカンソーのヘスターという特長のある考古学者達の人となりや業績が興味深く紹介されおもしろい。

辞 書

遺跡や文化の内容を解説した辞書は多いが、理論や用語あるいは分析法にかかわるものは少ない。むしろ先に掲げた各教科書巻末の用語解説をみるのが一番である。それらに加えて次の辞書が教科書を読んでいくのに若干の参考となろう。

Sara Champion, 1980, A Dictionary of Terms and Techniques in Archaeology, 1~144pp., Facts on File, Inc.

ここには321の用語が参考文献と共に手際よく解説されている。ついでには次のようなアメリカ考古学でよく使われる用語も含まれている。ただし遺跡の形成過程にかかわる用語等が全くみられず先の教科書の解読には充分とはいえない。

activity area, context, ecofacts, process.

household cluster, site catchment analysis, macro band, micro band.

processual archaeology, seasonality of occupation, 等

Ruth D.Whitehouse, 1983. The Macmillan Dictionary of Archaeology, 1～597、Macmillan Reference Books.

これには、各国の重要な遺跡や先史文化等の解説に加えて、一般・年代決定法・材質・技術・分析・環境・地理・土壌・花粉分析・植物・動物・遺跡調査技術・層位等・コンピューターや統計等にかかわる用語も含めて3500語が解説されている。

学 史 書

アメリカ考古学の学史については次の文献が直ちにあげられる。

Gordon R.Willey and Jeremy A.Sabloff, 1980, A History of American Archaeology, second 1～313pp., Freeman.

著者ウイリーは1942年にコロンビア大学で学位をとり、いうまでもなくアメリカ考古学会の大御所、セトルメントパターン研究の先駆者である。サブロフは1969年にハーバード大学で学位をとり、考古学理論のエースである。

本書では、500年にわたるアメリカ考古学の歴史が次の6期に整理されている。

1492～1940年 The Speculative Period

1840～1914年 The Classificatory-Descriptive Period

1914～1940年 The Classificatory-Historical Period:

The Concern with Chronology

1940～1960年 The Classificatory-Historical Period:

The Concern with Context and Function

1960年代 The Explanatory Period: Beginning

1960年代と1970年代 The Explanatory Period:

New Data and Interpretations

1970年代 The Explanatory Period:

Continuing Methodological and Theoretical Innovations

1974年に発行された第1版は既に小谷凱宣氏により翻訳がでている（小谷凱宣訳1979年『アメリカ考古学史』ウイリー・サブロフ 学生社）。第1版は1960年代末までの動向が収録されているに対し、第2版は新しい考古学あるいは過程学派の急激な展開が生じた1970年代末までの動向がつけ加えられた。ただし2版の翻訳はない。

問題集

考古学の理論と分析法にかかわる考古学の問題集を1冊だけ紹介しておこう。

Thomas C.Patterson, 1983, The Theory and Practice of Archaeology, A Workbook. 1~150pp., Prentice-Hall.

ここでは、先ず理解すべき基礎的な理論や分析法の解説があり、参考文献が提示される。次いで条件が与えられ問題が示される。巻末には解決のための論議があり、解答が示される。ちなみに問題は次の各項目についてである。

- 1 セリエーション
- 2 層位学
- 3 地域的編年の再構成
- 4 季節節性と居住時間
- 5 住居施設
- 6 行動空間、製作活動、分業
- 7 集落内部の構造
- 8 集落の位置: 遺跡領域分析
- 9 地域における集落の立地
- 10 交換
- 11 遺跡分布と社会階層
- 12 政治構成
- 13 社会変化

文献目録

先の教科書に主たる文献が掲載されているが、文献目録として独立して出版されているのに次のものがある。発行されてからかなり時間がたっているので、新版が必要である。

Robert F.Heizer, Thomas R.Hester and Carol Graves, 1980, Archaeology, A Bibliographical Guide to the Basic Literature, 1~434, Garland Publishing.

本書では、次の項目を更に詳細かつ具体的に細区分して合計4818冊の主要文献が収録されている。

考古学の性格や目的・考古学史・先史学への接近法・考古学の各種・各種遺跡の
代表例・野外調査・分析・解釈・職業としての考古学・文献集や辞書や地図

お わ り に

以上、典型的な教科書3冊とその解説の参考になるものをいくつか紹介した。なおヨーロッパにおける考古学の教科書的書物については、山中一郎氏による次のような有効な解説があるので参照されたし。

山中一郎 1986 「ヨーロッパ先史考古学の新しい試み」『古代文化 第38巻 第4号』
41-49